

# 第7号

定価一年間300円  
組合員の購読料は  
組合費に含む



発行

# 檜山教職員組合

〒043-0056 江差町字陣屋町 86-1  
Tel 0139(52)0858 FAX(52)1490  
発行責任者 白山 尚  
E-mail: hiyamakyoso@proof.ocn.ne.jp



『クレスコ』2017年5月号表紙

## 子どもの笑顔 みんなの願い

職場に署名用紙が回りまわらば、知人を含めぜひ協力をお願いします。

1. 新型コロナウイルスから子どものいのちと健康を守り、学ぶ権利保障のための教育条件整備。
2. OECD諸国並の教育予算への計画的増額。
3. 国の責任で小・中・高の35人以下学級の早期実現、「20人以下学級」を展望した少人数学級の推進。幼稚園や特別支援学級・学校の編制基準の引き下げ。
4. 標準法の改正で抜本的な教職員定数改善。
5. 教育費の保護者負担の軽減、教育無償化の推進。
  - (1) 高校・大学等学費無償化、給付型奨学金制度の拡充。
  - (2) 私学助成国庫補助の増額、就学支援金制度拡充。
6. 公立・私立とも豊かな環境で学べる条件施設の改善。
  - (1) 特別支援学校設置基準の策定、学校の新設・増設。
  - (2) 学校の耐震化、洋式トイレや教室へのエアコン普及。
7. 東日本大震災など災害、福島原発事故での被害の子どもを守り、学校と地域の要望を反映した復旧・復興。

恒例のとおりくみとして30年以上の歴史をもつ「ゆきとどいた教育を求める全国署名」が、今年も展開されます。国会と道議会に提出される2様の請願署名。北海道においては、教育や子育てに関わる関係団体で構成される「ゆきとどいた教育をすすめる北海道連絡会」が母体となつて推進されます。檜山教職員組合も構成員として、11月末の集約をめざしてとりくみます。請願事項の骨子は左表(国会提出用)。

# ゆきとどいた教育求め

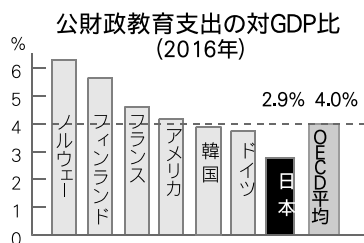
# 全国署名

# 救済

新型コロナウイルス感染症の拡大により、長期の臨時休校が行われ、子どもたちはかつてない不安やストレスを抱えることとなりました。また、いのちと健康を守りながら学習を保障することが大きな課題となりました。分散登校では感染拡大防止のため20人以下学級が実施されましたが、通常授業に戻るなか、教室の「密」回避が差し迫った課題として浮上しました。現行の40人学級では感染防止のための身体的距離の確保は不可能で、20人以下の少人数学級に見合う条件改善の

必要性はだれの目にも明らかになりつつあります。政府も、定数見直し「検討」を表明せざるを得なくなりしました。(裏面別掲) ゆきとどいた教育をすすめる上で、教職員の長時間過密労働の解消は不可欠です。この点からも標準法改正による定数改善は必須です。特別支援学校にだけない「設置基準」の策定や学費無償化・給付型奨学金制度の拡充も、コロナ禍のなかにあつてその実現は切実さを増しています。そもそも日本の公的教育支出は2.9%

と極端に少なく、OECD(経済協力



## 2020檜山合同教育研究オンライン集会



東京都出身、野球をやりたいと高校で硬式野球部に入部。百名を超える部員だったが、監督の佐藤道輔先生は一人ひとりを大事にし、練習機会も平等で、文字通り全員野球をめざす指導だった。地区大

「あごを出し、首を振り振り、ランニングする石橋の姿は、三年経っても変わらなかつた。しかし彼は、試合にこそ出なかつたが私にとって一番頼り甲斐のある選手に成長していつ

た「野球は下手でも、一生懸命ボールを追った無名の選手たち、数え切れないほど多くの誠実な魂を持った選手たちこそ、真のベスト・ナイン」かも

## 試され、助けられ、学びながら

8月27日に開催されたオンライン集会で上ノ国中の石橋英敏さんが、「これまでの教育実践を振り返って」と題して報告しました。管内各町から十数名が視聴しました。石橋さんは今年度で退職、「試され、助けられ、学びながらの道のりだった」と自身の教職史を顧みます。要旨を紹介しします。(裏面に関連記事)

会の決勝に敗れ、「人生の勝利者になればいい」と説く先生の言葉が刻まれている。練習試合の出場も叶わない存在だった。先生はそんな私を「かくれたベスト・ナイン」と温かく見守ってくれた。先生の著書にその心が書か

た。「こんな教師になりたい」と思うようになった。しかし、社会は難関、アルバイトをしながら通信で数学の免許を取り、各地の採用試験を受けた。北海道だけ合格、檜山での教職がスタートした。初任の今金中、担任を持ったが、何をどうやっていいか分からず右往左往。でも、先輩同僚に恵まれ、助けられた。(裏)

2020檜山合同教育研究 **オンライン** 集会

石橋英敏さん報告要旨

これまでの実践を振り返って



石橋英敏さん

を積極的に引き受け、自分の実践を振り返る機会としてきた。3つの実践を紹介したい。

子どもと地域と学校と 共に学ぶ姿勢大事にしたい

実践1 聞き取りから学ぶ 地域の漁業

最初の異動先は乙部町明和中。校下は小さな漁村。家族や地域の人々に、50年ほど前から現在までのスパンで、魚種や漁獲高、漁法や形態や規模、流通や収入、苦勞や喜びなどを聞き取る学習を実践した。グループで活動し、質問や記録、撮影などを分担。まとめて発表交流。魚業従事者減、漁獲高減、魚価安が共通課題として明らかに。漁師の思いに寄せながら意見交流を行った。「じつちゃんが大変そうだから漁師になる」「家族に『漁師になるな』と言われ『漁師任せにしないで日本全体で漁業のことを考えるべき』などの感想が出された。地域を深くとらえることは、

実践2 いまの平和学習 どのように学ばせるか

江差北中勤務時の一四年、社会科サークルで、小学校6年生に憲法九条について主体的に向き合わせる授業を参観した。一人ひとりが真剣に考え、自分の頭で判断していた。大いに刺激を受け、中学校での憲法学習に臨んだ。主題は平和主義。一通り平和主義の意味や歩みを学んだ後、これからの日本の安全保障について考えた。A「いかなる戦争も放棄し一切の軍備不保持」B「必要最小限の軍備を持ち直接攻撃されたとき

自らの暮らした歴史や社会を見つめることにつながる。疲弊するばかりの地域に気持ちも暗くなるが、子どもたちが生まれ育つ地域の現実を通して誇りも持たせたい。地域の課題はとりもなおさず日本社会の問題。将来展望をも見通し、希望を育む実践としたかった。

少人数学級「骨太方針」に

コロナ禍のもと、全国知事会・市町村会・町村会の会長がそろって緊急提言をまとめ、少人数学級編制を可能とする教員の確保を文科大臣に迫りました。日本教育学会も提言を発し、研究者、市民団体が各地で署名を展開、全国に運動が一向に広がりました。全国各校長会も要望したと伝えられています(教育新聞)。こうした動きを受け、7月17日に閣議決定した「経済財政運営と改革の基本方針2020」について(骨太方針)に、「全ての子供たちの学びを保障

する」と記述されました。その後の質疑で、「体制」とは学級編制に手をつけたい「少人数指導」なのかと質された萩生田文科大臣は、「40人学級の環境で感染症に耐えられるか。少人数学級の有効性も深掘りしたい」と答弁、初めて少人数学級についての検討を表明しました。法改正として着手されれば1980年来40年ぶりとなります。すでに6府県を除く自治体で独自の少人数学級が実施されていますが、財政力による格差が広がる一方です。国の責任での対応が急務です。なお、檜山で試算すると、35人学級で6、30人学級で13、20人学級で36の学級増となります。

教員としてのスタートは思いどおりにいかず失敗ばかり。特に担任したYくんとは衝突の毎日で、教師としてやっていけるかどうか試された日々だった。でも、周りの先輩方や同僚の支えが温かく、都度助けられた。なんとか卒業式を迎えることができた。卒業式を終えた後の教室で一人居残り泣き続ける生徒。Yくんだった。最後まで「反抗」の手を緩めることがなかったあのYくんが、一人涙している。胸の内に去来するものがあり、心がふるえた。この間、サークル活動を通して歴史教育者協議会(歴教協)に参加することになった。自主的に学ぶ場を得たことは、教師としての生き方に幅を与えてくれた。授業研など

表面の続き。駆け出しのこの苦勞を振り返り、様々な出会いが今日まで導いてくれたと言います。

20檜山合研 あいさつ&基調報告

白山会長が主催者あいさつ、内糸事務局長が基調報告を行いました。概要を紹介します。



白山合研 会長 石橋英敏

白山合研はオンラインでの開催。石橋英敏が実践を学ばせたい。ともに学ぼう。

危機のなかだからこそ実践交流

暑い日が続く、感染防止に加え熱中症対策にも配慮しながらの学校は苦慮が尽きない。子どもたちのための実践を現場から編み出して、いこうと努力されている現場の先生方に心よりの敬意を表したい。本集会はオンラインでの開催。白山合研の皆さん、石橋英敏が実践を学ばせたい。ともに学ぼう。



内糸俊男事務局長

道内のある民間教育研究団体が会報で「コロナ禍のなかの学校と子ども」の特集。二つの論考を紹介したい。一つは、管理職

退職者の論考。他を排撃する風潮の顕在化を取り上げ、人間関係の構築と教育の営みを考察した一文。人としてのつながりが生きたる「過疎地」の可能性について言及、その教育の今日的意義を強調。共同性を求める人間観を視座に「自ら考え課題を解決する」教育の実現に向けた実践視点を説く。二つは、現職小学校教員の論考。コロナ禍が奇

くも明かすこととなった学校の姿。議論して練り上げるのでなく上からの指示を仰ぐ現場。抑圧的な空気のなかで人間らしく生きたいと子どもたちが叫ぶ。両者はすでにコロナ禍以前に学校の姿としてあった。「考えない職員室」と「模索する子どもたち」との相克を埋める営みは、すぐれた教育実践の課題である。保護者との関係を築

く前に不信が助長される姿もあり、子どもを育む営みの共同性は必須だと結ぶ。教育の根本を考えさせる。「学習の遅れを取り戻す」として5教科中心の授業が配置される。技能芸能教科で育てる力もあるはず。高校入試範囲の縮減に対し「生徒のやる気が削がれる」との反応もある。テスト対策の学びは本物か。本物の学びとは何か、学校とはどういうところか、探していこう。

子どもとつむぎの「学校」を求めて

「理想はわかっていても戦争のない平和な時代は難しいのかな」「考えれば考えるほど難しい」「戦場に行けば必ず死者が出る、それは嫌だ」等々。憲法を目的の子供もたちと共に考え、学び直していきたいと思います。今を生きる教師として。(次号に続く)